ソシュールの伝説・神話研究と推論的範例（パラダイム）

Les recherches sur les légendes et les mythes de Ferdinand de Saussure et le paradigme indiciaire

金　澤　忠　信

要　　旨

ソシュールは1903年から1910年にかけて伝説・神話研究を行っていた。1904年には書物の出版を予定していたが未完に終わる。草稿では『ニーベルンゲンの歌』をはじめとするゲルマン伝説が5－6世紀ブルグント王国での歴史的出来事にもとづいていることが示されている。叙事詩と年代記の様々な細部を照合してまず目につくのは，伝説にはフランク族が不在であり，フン族に置き換えられている点である。ソシュールはその理由として王権への配慮と呼称の問題をあげているが，前者は推論的考察，後者は社会学的考察と言える。ソシュールの伝説・神話研究の方法論は，ごく些細な手がかりによって深い現実を捉えようとする点ではギンズブルグの推論的範例（パラダイム）に近いが，医学的症候学にもとづいておらず，徴候的読解とは言えない。ソシュールの関心はあくまで伝説の起源としての歴史的事実にあり，必ずしも隠されざるをえなかった重大事にあるのではない。

キーワード

ソシュール，伝説・神話研究，ニーベルンゲン，推論的範例（パラダイム）

1．伝説・神話研究の「書物の草稿」

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール〔Ferdinand de SAUSSURE（1857–1913）〕は，少なくとも1903年7月頃から1910年10月にか

けて，伝説・神話研究を行っていた。この年代は伝説・神話研究にあてられたノートや紙片に稀に記載されている日付によって特定される[1]。確認される最初の日付は「1903年７月６日」[2] で，この日に開催される行事の入場券（同じものが２枚）の裏に，グンテル，ハーゲン（いずれも『ニーベルンゲンの歌』の登場人物），クローヴィス〔Clovis (466？-511)〕，ゴデギゼル〔Godegisèle (？-500)〕，ジギスムント〔Sigismond (？-524)〕，そしてドイツの歴史家ヴィルヘルム・ユングハンス〔Wilhelm JUNGHANS (1834-1865)〕[3] などについて書きなぐられたようなメモが残されている。この日付は入場券に印刷されたものなので，必ずしもソシュールがこの日にメモを書いたとはかぎらないが，おそらく時期的にそれほど離れていないと思われる。ソシュール自身による日付としては，「1903年12月７日」が手紙の下書きに見られる[4]。名宛人は記されていないが，冒頭で数週間前に催促された質問への返答の遅れを詫びたあと，『ユオン・ド・ボルドー』〔*Huon de Bordeaux*〕と『オルトニート』〔*Ortnît*〕，『ヴォルフディートリヒ』〔*Wolfdietrich*〕との一致点について言及している。さらに，「シャルル・ボネ通り４／ジュネーヴ／1904年４月」と印刷された紙片[5] には，『ニーベルンゲン』に関して参照すべき書物が何冊かあげられている。また，ソシュールは1904年夏学期（４月８日～７月15日）にジュネーヴ大学文学部の同僚エミール・ルダール〔Émile REDARD (1848-1913)〕の代行で，『ニーベルンゲン』に関する講義を行っているのだが[6]，夏学期を終えたばかりの「７月22日」に妻マリー〔Marie de Saussure (1867-1950)〕宛ての手紙のなかで『ニーベルンゲン』に関する書物について言及している。

あなたはニーベルンゲンの近況についてお尋ねですね。それは二つの観点で秀逸です。１°私はあなたから，今私の成果を非常に堅固できわめて興味深いものにしている数多くの発見を得ました。２°そのすべ

てが新しく，そして同時に私にとってふだんの仕事とだいぶ違っていて，疑う余地もなくそれは一冊の書物となる――実際に出版される――ことでしょう，それもかなり近いうちに。休暇の終わりとともに印刷を始める手筈を整えたいと思います[7)]。

手紙の文面からは，妻から『ニーベルンゲン』に関する多くの新情報を得ていたこと，それが「ふだんの仕事」とは違う種類のものであったこと，それをもとに近々書物を出版するつもりだったことがわかる。そして，表紙に一度« Rosengarten »〔『〔ヴォルムスの〕薔薇園』〕と書かれて抹消線を引かれ，« Varia (Vufflens I) »〔雑録（ヴュフラン I）〕と書き直されたノートの最終頁には，「1904年７月末」（実際には30日）に上演されたジュール・ボワ〔Jules BOIS (1868-1943)〕による古典劇『イポリットの戴冠』〔*Hippolyte couronné*〕についての「８月１日」付け『タン』紙〔*Le Temps*〕の記事が引用されている[8)]。このノートは，内容と分量（38枚表裏ほぼ全紙面）に鑑みて，「ニーベルンゲン講義」が行われ，妻からなんらかの情報提供があった時期に執筆されたと推測される。

それから約１年後，「1905年８月19日」の日付が「フェルディナン・ド・ソシュール氏」に宛てた銀行からの書類に見られる。その裏面には伝説（『ニーベルンゲン』のグンテル，ゲールノート，ギーゼルヘル）と歴史（グンドバット〔Gondebaud (？-516)〕，ジギスムント，ゴドマール〔Godomâr [Godomar] (？-534)〕）の関係についてのメモがある[9)]。さらに５年後，ニーベルンゲンにあてられたノート[10)]の表紙に「1910年10月」と記されている。

この間，アナグラム研究の時期（1906年夏頃～1909年４月）があり，３回の「一般言語学講義」の時期（1907年１月～７月，1908年11月～1909年６月，1910年10月～1911年７月）とは一部重なっている。ソシュールは1912年の夏に病に伏し，妻の実家から譲り受けたヴュフラン城で1913年２月22日に亡

くなっているので，伝説・神話研究は最晩年まで断続的に行われていたと見てよいだろう。

結局，伝説・神話研究の「書物の草稿」は，一般言語学の「書物の草稿」と同様，一冊の書物になることはなかったが，手稿のなかには書物のタイトル案，構成案（目次），書物の基本方針や方法論を記した序文らしき文言が散見する[11]。たとえば表紙に「ニーベルンゲンの歌」〔Nibelungen Lied〕と書かれたノートの末尾[12]には，「ブルグント伝説としてのニーベルンゲン伝説――詩の歴史的解釈の新たな試み」，「ニーベルンゲンの詩とブルグントの国民的伝説――詩の歴史的起源をめぐる解釈の新たな試み」とあるのだが，いずれも抹消線が引かれている。そのすぐ下の「ブルゴーニュ第一王国とドイツの叙事詩的伝説――ニーベルンゲンの叙事詩の歴史（イストワール）への寄与」，「ジークフリートの伝説とブルゴーニュの第一王国の歴史（イストワール）――伝説の歴史的解釈の新たな試み」には，全体ではないがやはり部分的に抹消線が引かれて修正が施されている。ちなみに当該ページの下部には注らしきものが付けられており，「私はすべての歴史学者にならい，5世紀と6世紀についてブルグントおよびブルグンディアと言う。また同じく彼らにならい，ブルゴーニュ第一王国と言う」とある。また別の箇所には，冒頭に「タイトル？」として「歴史（イストワール）と伝説」，そしておそらくサブタイトルとして「英雄伝説（ヘルデンザーゲ）の名で知られるゲルマン諸伝承の起源についての研究」と記されており，さらに続けて第1部のタイトル「I. ブルゴーニュのグンドバットの王朝およびニーベルンゲンの伝説」（「第1部　ブルゴーニュの王国およびニーベルンゲンの伝説」を書き直したもの）も見られる[13]。

書物のタイトルとして「歴史（イストワール）と伝説」はきわめて簡潔かつ印象的であるように見えるが，これがいくつかのタイトル案のうち比較的あとに執筆されたものなのかどうかは不明であり，そもそも疑問符つきのタイトル案なので，これで決定というわけではなかったはずである。しかし，いずれ

にせよ，ソシュールが「書物」で何をしようとしていたかは，これらのタイトル案からうかがい知ることができる。ソシュールの伝説・神話研究の前提であり最終的な結論とは，ひとことで言えば，伝説の根底には歴史がある，ということである。実際ソシュール自身次のように書いている。

> この巻のタイトルが示しているのは，ブルグント人たちによって，ブルグンディア第一王国の名でサヴォワに創設された王国において，443年から534年にかけて展開した諸々の出来事のあいだに，我々はひとつの歴史的な場を想定している，ということである。実際そういうものが我々の考えであり，我々の確信である。我々にとって，ブルグント叙事詩を説明してくれる中心的なグンテルは，434年に死んだグンダエハリウス〔*Gundaeharius*〕ではなく，516年に死んだグンドバドゥス〔*Gundobadus*〕である[14]。

ソシュールは，「歴史（イストワール）と伝説」を「真実と虚構（フィクション）」として対立させるのではなく[15]，むしろ「ひとつの叙事詩的説話が細部に至るまで現実の出来事を再現していたかもしれないという可能性」[16]に賭けるかたちで（「ホメーロスとシュリーマンを思い起こしてみよう」[17]），叙事詩と年代記とを比較対照し，固有名（人名・地名），人物の性格・特徴・地位・身分，人物たちの相関関係，行為・出来事の動機・経過期間・継起順および地理（位置関係・距離・移動の経緯），場面設定，装身具・アクセサリー等々，ありとあらゆる「細部」の一致点および不一致点の一覧表を作成する。そしてその膨大な照合作業の成果を一冊の書物としてまとめようとしている。

『ニーベルンゲンの歌』および北欧の英雄伝説の成立には，ブルグント国の滅亡という歴史的事実がなんらかのかたちで関与していると考えられる[18]。413年に建国され437年にフン族に滅ぼされた歴史上のブルグント国

と伝説上のブルグント国はウォルムスを中心都市としている点で一致しているが，437年頃に実在した歴史上のブルグント族の人物と伝説上の人物とのあいだに名前および人物像の一致は見られない[19]。上の引用中にもあるように，ソシュールは，ウォルムスを中心都市とする5世紀のブルグント国ではなく，リヨンを中心都市とする6世紀のブルグント国に着目し，そこで起こった歴史的出来事，具体的には522年にリヨンで起こった王子ジゲリック〔Sigéric（？-522）〕の暗殺が，英雄ジークフリートの死として伝説に取り入れられたと想定する[20]。しかしながら，歴史と伝説のあいだには，時代，地理，人物の名前・特徴・役割・世代などに関して，「置き換え」，「転位」，「縮約」（何人かの人物を一人の人物にまとめる），「分割」（一人の人物を何人かの人物に分ける），「装飾」（凄惨な暗殺を英雄にふさわしい死に脚色する等々）があることに注意する必要がある。

2．フランク族の不在あるいはフン族への置き換え

『ニーベルンゲンの歌』をはじめとするゲルマン伝説の起源が6世紀のブルグント王国で起こった一連の歴史的出来事にあるとすれば，実質的にブルグント王国を滅亡させたフランク王国は当然伝説においても登場してくるはずである。しかし実際には，フランク王国は伝説のなかでブルグント王国と敵対していないばかりか，名指されることすらない。ソシュールはこのことについて手稿のなかで繰り返し言及し，その理由について考察している。

二つの基本的な予備的説（テーゼ）

1．ゲルマン伝説において**フランク国民**およびメロヴィング王朝に関連する要素が皆無であることは，この伝説に関して議論されるあらゆる事柄のうち，批評家にとって最も衝撃的であり，驚異的であると

言ってよい。無いという点で終始一貫しているこの欠落は，どんな細部であってもフランク族についての言及を許していない。なぜ欠落しているのかは，説明不可能であるように思われる。あるいはむしろ，ありえないような特殊な事情がはじめからあったように思われる。

これこそ，他の説（テーゼ）を持ち出すまでもなく，ゲルマン伝説の特異性として指摘しうるものかもしれない。

それゆえ，たんなる名前の転位によって，ゲルマン伝説全体のなかでフランク族を表しているのはフン族であるという主張を加味するなら，けっして気まぐれの思いつきではない，次のような仮説の特徴が考慮されるようになるだろうと我々は期待する。それは，伝説がゴートのディートリヒ，ブルグントのグンテル，テューリンゲンのイルンフリトについて語っている一方で，クローヴィス家については完全に沈黙することによって，いわば暗示されている仮説である。その証拠は，我々が立証できるとすればの話だが，無数の事例を調べたうえで，伝説がフン族を名指すときには直接フランク族について語っているということが次第に明らかになっていけば，そこから結果的に導き出されるだろう[21]。

この文章が書かれたページの裏面には「この問題はXXX頁で再度扱われる。フン族とフランク族の同一性については原理上信頼できないものとすることがいかに正当性を欠いているか，そこで示したいと思う」[22] とあり，予告されていた「書物」のなかでもフランク族からフン族への全面的な置き換えの問題が取り扱われることになっていたことがわかる。別の手稿にはそのための「計画（プラン）」が記されており，当該の問題に一章分があてられている。

計画

Ⅰ．5－6世紀の歴史的出来事と純粋なノルド伝説。

Ⅱ．歴史的出来事と純粋な南ドイツ伝説。

Ⅲ．それら三つの素材の照合と事後的調査。

Ⅳ．『ニーベルンゲンの歌』第39歌章にたいする注釈のかたちでの成果。

Ⅴ．伝説によるフランク族とフン族の混同の仮説，そしてそれについて言いうること[23]。

さらに別の手稿では，フランク族からフン族への完全な「転位」について，「この巻の最後にそれに特別な章をあてる」，「フン族とフランク族のあいだの名および役割のこうした転換をさしあたり認めるよう読者に要請する」[24]と書かれており，「書物」の「計画（プラン）」を裏づけるかたちになっている。

ソシュールはまず，伝説の原初形態においてはフランク族とブルグント族の対立があり，それがある時点で，ありとあらゆる細部に至るまで，フランク族からフン族への全面的な置き換えが生じて，伝説からフランク族が完全に消え去るかたちでフン族とブルグント族の対立になったと考えた[25]。しかし「詳細な調査」の結果知り得た「すべての事実」に鑑みて，それは「誤り」であったことが判明する。「フランク族からフン族への置き換えおよびクローヴィスからアッティラへの置き換え」に関して，アッティラがゲルマン伝説にお馴染みの登場人物として広く伝播するようになったからといって，伝説が成立した当初の段階で別の人物との混同などありえなかったとは言えない。「置き換え」の契機としてソシュールが第一に想定するの宗教の問題，あるいはむしろ王権の問題である。

1°アッティラは伝説にとっては異教のヨーロッパの大王の典型――唯一の典型――である。ところで，このことは，クロティルドが恨み

を晴らす手段を手に入れるために**異教の**王との結婚を甘んじて受け入れたことを語る伝承との結び目になっている。のちに異教のフランク君主を認めることが不可能であり不都合であっただけに，また，ほかならぬ第一伝説のこの特性（ニーベルンゲンの歌のなかで相当な役割を果たしている）によってアッティラにまっすぐ目が向けられただけに，そのぶん結び目は強固である[26)]。

クロティルド〔Clotilde（？-544）〕は『ニーベルンゲンの歌』などゲルマン伝説のなかで「復讐の鬼」として描かれるクリームヒルトのモデルの一人とされる。彼女はアリウス派のブルグント王家にありながら，母の影響でカトリックを信仰していた。クロティルドはブルグント王家の親族どうしの血で血を洗う権力争いに巻き込まれ，苦難のなかで幼少期を過ごすが，成長してフランク王クローヴィス〔Clovis（465/466-511）〕に求婚され，王妃となる。トゥールのグレゴリウス〔Grégoire de Tours（538-594）〕によれば，クローヴィスのカトリックへの改宗にはクロティルドが大きく関与したとされる。逆に言えば，クロティルドとの結婚以前，クローヴィスは「異教の王」であり，フランク王国は創設時には異教（非カトリック）の国だったことになる。「のちに異教のフランク君主を認めることが不可能であり不都合であっただけに」，伝説は王権に配慮し，クローヴィスおよびフランク族のことは伏せ，異教の王の典型であるアッティラおよびフン族に，クリームヒルト（＝クロティルド）の復讐の手段という役割を移し替えた，ということになろうか。上の引用からはそのようにも読めるが，ここでは誰にとって「不都合」なのかについて，あるいは「不都合」に苦慮する伝説作者の意図について深く掘り下げられてはいない。

フランク族からフン族への「置き換え」の理由として二番目に想定されるのは，地理および呼称の問題である。ビザンティンの著者たちが，ビザ

ンツ帝国から見て西方に位置するフランク族のことを「フランゴイ」〔Φραγγοι〕と呼んだり，フランク族を含むゲルマン人を総称して「ゲルマノイ」〔Γερμανοι〕と呼んでいたのと同じように，イタリアのゴート族は，ブルグント族以外の北方のゲルマン人のことを「フン族」と総称していたのではないか。また，さらに北方のスカンジナビア人たちも，自分たちのいる場所から見て南方の東部地域にいるゲルマン人のことを「フン族」と総称していたのではないか[27]。もしそうであるとするなら，これは「置き換え」というより厳密には「混同」ということになる。イタリアのゴート族が「北方」ないし「北欧」を「フン族の国」と総称していた可能性に関して，ソシュールはドイツの歴史家フェリックス・ダーン〔Felix DAHN (1834–1912)〕の『ゲルマン人の王たち』第3巻第4章第1節「ロマニスムス」[28]を援用しつつ，「他のゲルマン諸国民より文明化した国民であるというゴート族の驕り」を指摘している[29]。

さらに，アッティラにまつわるハンガリー伝説から「混同」の証拠を引き出そうとしている手稿もある。

クローヴィスおよびフランク族に属するものを
アッティラおよびフン族の名に
伝説はどのようにして移し替えることができたのか

私にとってはまったく疑う余地のない事実の原因について結論を表明するにあたり私自身すこぶる不確定な状況にあるわけだが，混乱のあらゆるポイントのうちで最もありそうもないポイントによっておよそ可能なあらゆる議論を提起することにする。だが，その事実の特異性に鑑みて，これはやはり言及に値する。

1．シカンブリアは，ケーザのシモン（1600？）[30]のハンガリー伝

説によれば，ハンガリーにおけるアッティラの首都の名であることにまちがいない。この名は純粋にパンノニアのものである。

それゆえ，ほぼまちがいなく，5世紀には，シカンブリアの王〔*rex Sicambriae*〕とは，完全に，言葉遊びによって，フン族の王あるいはフランク族の王を暗示していた可能性がある。これは同世紀のよく知られているごく近いいくつかの事実が認可するところである。

これは我々があえて主張したいポイントではないし，混乱を明確化することができたと本気で思っているわけではないが，指摘しておいてよいだろう[31)]。

この引用文中にはどの視点から見るのかは明示されていないが，おそらくスカンジナビア人たちから見て，あるいはゴート族から見て，「シカンブリアの王」とは「フン族の王」のことであり，「フン族」とは「フランク族」を含んだ総称ということになるだろう。スカンジナビアに伝播した北欧の英雄伝説についてはそれで説明がつくかもしれないが，「南方」から見た場合，あるいはドイツから見た場合はどうなるのか。

――フランク族の人物たちを混同したり，次第に疎外したりする原因としてありうるのは，彼らが徐々にローマ化していったということである。もしシャルルマーニュがほぼローマ人とローマ化されたフランク族にしか叙事詩を口承しなかったとしたら<特にローマ的なカロリング叙事詩の存立以降は>，ドイツでは，シャルル自身の先人たちであったとかなりはっきり知られていた者たちとともに馴染みの国にいるとはもはや感じられなくなってしまうのは当然である。少なくとも彼らを「国民的」と扱うのはためらわれる。この人々の民族的性格については杳（よう）として知れない[32)]。

つまりドイツでは，フランク族のローマ化が進み，すでにシャルルマーニュ〔Charlemagne［Karl I］(742？-814)〕の時代には5－6世紀のフランク族との連続性の意識は完全に途絶え，フランク族はフン族と「混同」されるまでになった，あるいはローマ化以前のフランク族はローマ的な叙事詩から「疎外」された，ということになろうか。もしそうだとすれば，クロティルドと結婚する前のクローヴィスがカトリックへの改宗（＝ローマ化）以前の異教の王であり，そのことを隠蔽するためにクローヴィスおよびフランク族をあらかじめ伝説から閉め出したこととともつじつまが合う。

クローヴィスおよびフランク族からアッティラおよびフン族への「置き換え」の第一の理由と第二の理由は相反するものではなく，むしろ両立可能なものである。あえて言うなら，第一の理由は「推論的」であり，第二の理由は「社会学的」である（「我々の時代は何でも社会学だ」[33]）。いずれにしてもソシュールは，「暗示されている仮説」について，その証拠を「無数の事例を調べたうえで」，「結果的に導き出」そうとする。この方法論は学問的にどのような範例（パラダイム）に属している，あるいは属していないと捉えればよいだろうか。

3．伝説・神話研究の方法論――推論的範例（パラダイム）との比較

イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグ〔Carlo GINZBURG (1939-)〕は「徴候――推論的範例（パラダイム）の根源」[34] において，ドイツの美術史家アビ・ヴァールブルク〔Aby WARBURG (1866-1929)〕の言とされる「神は細部に宿る」をエピグラフに掲げたうえで，19世紀末頃，正確には1870年から1880年にかけて現れ始めた認識論的モデルについて論じている。ギンズブルグはそれを「推論的範例（パラダイム）」と名づけ，代表的な三人の名をあげている。一人目はイタリアの医師ジョヴァンニ・モレッリ〔Giovanni MORELLI (1816-1891)〕である。この人物はイワン・レルモリエフ〔Ivan LERMOLIEFF〕というロ

シア人風の偽名（ほぼ本名のアナグラム）を使って美術雑誌に評論を発表し，絵画の作者特定のための新たな鑑定法を提起した（1874-1876年）。二人目は推理小説「シャーロック・ホームズ」シリーズで知られるイギリスの作家コナン・ドイル〔Conan DOYLE（1859-1930）〕，三人目はオーストリアの精神科医ジークムント・フロイト〔Sigmund FREUD（1856-1939）〕である。フロイトはモレッリの鑑定法にもとづいて「ミケランジェロのモーゼ像」（1914年）を執筆しているのだが，ギンズブルグによれば，三人に共通しているのは，ふつうは重要性に乏しく，ありきたりなものとみなされ，見すごされてきた細部や「不用意な小さい身振り」など，ごく些細な手がかりによって，それ以外の方法では到達し得ない深い現実を捉えようとする態度であり，そしてそれが医学的症候学にもとづいている点である。特にフロイトにとっては，そうした一見不必要なものや副次的な与件こそが真実，すなわち意識の支配から逃れる個性の中核を表わしており，それらに見合った解釈方法を作ろうとするモレッリの考えは，精神分析の創設に直接関わる重要な要素だった。

> 私がそもそも精神分析などというものに首を突っ込み出すよりずっと以前に聞き知ったことであるがロシアの一芸術鑑識家イワン・レルモリエフ（その最初の諸論文は一八七四年から一八七六年にかけてドイツ語で発表された）が，多くの絵画の，これまで普通にはその作者とされてきた画家の再吟味を行ない，本物と模写とを確実に区別することを説き，それまでその絵に貼られていたレッテルを剥いで新しい芸術家の作品と鑑定することによって，ヨーロッパ各地の美術館に革命をまき起こしたことがあった。彼は，絵の全体印象や主要な特徴を度外視せよといい，第二義的な細部の，たとえば指の爪，耳朶，光輪，その他のこれまで見過ごされていたような事柄など，つまり模写画家がそこ

まで正確に模写しなくてもと考えたような部分，しかも芸術家たる者ならば彼独特のやり方で描き上げるような部分，そういう些細な点の特色的な意義を強調することによって，この仕事をなしとげたのであった。ところがこのレルモリエフというロシア名は実は偽名で，この人は本当はモレッリというイタリアの医者であった。私はあとでこのことを知ってひどく興味を覚えた。この人は一八九一年にイタリア王国元老院議員として死んだ。私は彼のやり方が医学的精神分析技術にきわめて近いものであると思う。精神分析もまた普通たいして重視視されないような，観察の残り滓から，秘密を，隠されたものを判じあてるのが常である[35]。

ギンズブルグは同じ箇所を引用したあとで，フロイトがモレッリの評論を読んだ時期を推定している。それは二度あり（「精神分析などというものに首を突っ込み出すよりずっと以前」，「あとでこのことを知って」），一度目は1883年から1895年（『ヒステリー研究』）ないし1896年（「精神分析」という用語を初めて使用したとされる）までのいずれかの時，二度目は1898年９月14日にミラーノでモレッリの著書を購入した時である。

ギンズブルグは，人間の知的活動の最古の形態として，古代の狩人が「泥に刻まれた足跡や，折れた枝，糞のちらばりぐあい，一房の体毛，からまりあった羽毛，かすかに残る臭いなどから，獲物の姿や動きを推測」[36]していたことに触れ，こうした狩猟でつちかわれた英知の特徴を，「一見して重要性のなさそうな経験的データから出発して，実際には実験が不可能なある複雑な現実にさかのぼる能力」[37]と規定する。さらに，この英知のもう一つの特徴として，一見些末な経験的データの観察者は「そのデータを一つの物語として配列する」。「部分から全体を見る，結果から原因を探る」方法論にもとづく狩人の物語は「換喩（メトニミー）を軸にした散文に帰す」ものであ

り，「そこからは隠喩は厳重に排除されている」[38]。

さて，本論の冒頭で見たように，ソシュールが本格的に伝説・神話研究を行っていたのは1903年から1910年までの時期であると推定される。1904年７月の時点では「かなり近いうちに」伝説・神話研究の書物の出版が見込まれていた。この「書物」の方法論は，ギンズブルグの言う「推論的範例（パラダイム）」にかなり近いものだったはずである。伝説・神話研究においてソシュールが特に注目するのは，「深遠で，劇的で，道徳的な意味をもっているとされる物語（イストワール）」の「中心的な話題」ではなく，「中心的な話題」にとって「意味も時宜も認められない単調かつ無用な出来事」である。というのも，「中心的な話題」とされるものは「説話を潤色したり調整したりするため」の「事後的な創作」であって，「物語（イストワール）全体の真の実体を含」み，叙事詩の「古い基盤」をなすのは「無用で，たいして面白くない事柄」のほうだからである[39]。「伝説をまとめる詩人」が，英雄にふさわしくない事柄をあとからわざわざ叙事詩に付け加えるはずはなく，翻ってそれはすなわちもともと「古い基盤」にあったとする「詩趣喪失」〔*dépoétisation*〕[40] の原理にもとづいて，ソシュールはありとあらゆる「細部」の検証作業を行い，実際には再現が不可能な，ある複雑な歴史的諸事実およびそれらの継起順（物語（イストワール））を再構築しようとする。これは「部分から全体を見る，結果から原因を探る」作業と，多少とも類似していると言える。

仮に1904年７月に予告されていた「書物」が出版されていたとしたら，『歴史と伝説』の著者はギンズブルグの言う「推論的範例（パラダイム）」の四人目の代表者候補になり得ただろうか。おそらくそうはならなかっただろう。ソシュールは，一見無意味なもの，ありきたりなもの，見すごされてきた細部など，ごく些細な手がかりによって深い現実を捉えようとする点では「推論的範例（パラダイム）」の３人の代表者と共通しているが，ソシュールの場合，医学的症候学にもとづいておらず，意識の支配から逃れる個性の中核，すなわち

無意識の探究に向かっていると言えるかどうかは疑わしい。ソシュールは「記憶欠落の上での想像力は，かえって伝統にとどまろうとする意志を伴った変化の主たる要因である」と述べてはいるが，詩人の無意識を深く掘り下げることで伝説の変容以前の原初状態を再構成するような方向性で研究を行ってはいない。むしろ，「作者あるいは語部（かたりべ）には，彼よりも前の時代に語られていたことをできるかぎり踏襲しようとする意図」があり，「この点に関しては，根深い保守的傾向が伝説の世界全体をくまなく支配している」[41] と捉え，現存する伝説のなかになおも残っている，一見すると無意味・無用な細部を網羅的に収集し，対照・検証作業を徹底的に行っている。作者の主観ないし無意識を排除するかたちで細部に執着するソシュールのこうした態度は，医学的症候学ではなく，文献学によって培われたものである。1891年11月 6 日の第 1 回ジュネーヴ大学開講講演でソシュールは「現象の究極の細部こそが現象の究極の理由でもあり，したがって極度の特殊化だけが極度の一般化に〈有効に〉寄与しうることがわかる」[42] と述べているが，この方針を共有する研究者として名前があがっているガストン・パリス〔Gaston PARIS（1839–1903）〕とポール・メイエール〔Paul MEYER（1840–1917）〕はフランス近代文献学の創始者でもある。ちなみにこの二人は雑誌 *Romania* を創刊しており，ソシュールはトリスタン伝説に関して，この雑誌に掲載されたパリスやジョゼフ・ベディエ〔Joseph BÉDIER（1864–1938）〕の論文を参照している[43]。

山田広昭が「推論的範例（パラダイム）」に連なる「徴候的読解」[44] の一例として取りあげる坂口安吾の論考と比較してみる時，精神分析的ではないソシュールの方法論はより際立つように思われる。安吾は「飛騨高山の抹殺」と題された評論において，交通の要衝であり日本神話では重要な場所であったはずの飛騨が『古事記』や『日本書紀』でほとんど言及されていない理由について考察している[45]。

隣の信濃はタケミナカタの神がスワ湖へ逃げてきて天孫に降参したという国ゆずりの事変の最後の抵抗地点で日本神話では重要なところだ。ところが，現天皇家が本当に確立の緒についたとみられる天武持統の両御夫妻帝（天武は天智の弟で，天智の御子大友親王《弘文天皇》を仆（たお）して）皇位に即（つ）き，実質的には現天皇家の第三祖に当られる御方のようです）はヒダとスワの両国に対して特にフシギな処置をほどこしております。スワは信濃の国に属しておりますが，一時分離されてヒダ，スワと二国特別の扱いをうけた。その理由は国史の表面には一度も説かれておりません。特にヒダは古代史上，一度も重大な記事のないところで，昔から鬼と熊の住んでいただけの未開の山奥のようだ。ところが国史の表面には一ツも重大な記事がないけれども，シサイによむと何もないのがフシギで，いろいろな特殊な処置がある隠されたことをめぐって施されているように推量せざるを得なくなるのです[46]。

安吾は，飛騨の史実に「隠された何か」を再び見出すにあたり，「両面スクナ」の伝説に着目し，この「一体二面」の異形の怪物を「双生児」とする解釈を試みながら，日本神話においては大碓命と小碓命（日本武尊）をはじめとして必ず「分身的な兄弟姉妹」がおり，これが日本神話の類型となっている点を指摘する[47]。分身的な兄弟は「二人合わせて一人」を意味する場合があり，また「表向きの主役」のほうは「真実が歪（ゆが）めてあって」，「端役的で目立たない」ほうがこの「真実を解く暗示」になっている。こうして安吾は，日本武尊が景行天皇に疎まれ殺意をもって悪者退治に出されたというのは「表向き」で，大碓命が暗示するように，彼は飛騨か美濃に住み，そこの王女と結婚して諸国を平定しつつあった首長で，景行天皇と血のつながりはなく，天皇と敵対していた，という「真実」を解き明かす。安吾はさらに，日本神話における多くの分身的兄弟の例はみな同一の事件，

同一の人物を指しているとまで推論を押し進める。日本の神も天智以前の天皇も，実は何代もいるわけではなく，百年にならないくらい短い。その間に，国譲りやクーデタなどの大事は，せいぜい二つか三つか，多くて五つ程度だった。いずれにしても，そうした大事は秘密として隠す必要があった。なぜなら，「それぐらい現実的で生々しくて，つまり時間的に遠からぬ短期間のうちに起った問題」[48] だったからである。そうして「その重大なことを，あの神様，あの天皇，あの悪漢にと分散してかこつけて，くりかえし，くりかえし，手を代え，品を代えて多くの時代の多くの人物にシンボライズ」[49] することによって偽装したのである。ここで安吾が神話や天皇記の読者と作者両方の意識（あるいは無意識）を考慮していることに注意しておいてもよいだろう。「それは正しい真相を知る者が読んでも，どこかで正しい真相と引ッかかりがあって，彼らをも，また自分の良心をも，どこかで満足させる必要があったせいだろう」[50]。

安吾の推論の結論として，『古事記』と『日本書紀』がどうしても隠さなければならなかった重大事とは，壬申の乱（672年）である。このとき天智天皇の後継をめぐり，天智の子大友皇子と，天智の弟で皇太子の大海人皇子が争った。大海人皇子が，兄である天智天皇の生前に，疑いや憎しみをうけて殺されそうになり，いったん大友皇子に皇太子を譲って吉野に隠れる。しかし，天智天皇の死後，クーデタを起こして大友皇子を殺し，天武天皇として即位する。『古事記』の編纂を命じた女帝（元明天皇）は，天武天皇の皇后であるので，天武側に有利に話を作るのは自然だが，自身の父である天智，弟である大友皇子の側を悪しざまに作るわけにはいかず，細部に至るまで国史の偽装のつじつまを合わせるために，あらたに『日本書紀』の編纂を命じたのではないか，というのが安吾の見立てである。飛騨が「空白」になっているのは，壬申の乱の陣立が実は飛騨を中心に東西に分かれており，むしろきわめて重要な土地だったため，壬申の乱とともに

国史から「抹殺」する必要があったのである。

ソシュールは，ゲルマン伝説におけるフランク族の「不在」に関して，伝説の作者（語部（かたりべ））があまりにも重大であるがゆえに隠さざるをえなかった何かの「徴候」として読んではいない。少なくとも，基本方針としてそのような読み方はしていない。あくまで「不在」あるいは「置き換え」の理由の一つとして王権への配慮をあげているにすぎない。実際，王権あるいは国民性の歴史的連続性が途絶えてしまったことも「置き換え」の理由の一つとしてあげられている。ソシュールの「推論」が「徴候的読解」にまで至らないのは，彼の方法論が不徹底だったからというよりも，おそらく彼の主要な関心が「あまりにも重大であるがゆえに隠さざるをえなかった何か」にあるのではなく，重大であるか否かを問わず端的に「歴史的事実」にあったことによる。この点でソシュールの方法論は徹底的であり，徹底的に単純である。

ソシュールは，ゲルマン伝説のもとになったと考えられる一連の「歴史的事実」を，クロティルドに関するトゥールのグレゴリウスの記述[51]に依拠しつつ，探り出そうとする。ソシュールは「トゥールのグレゴリウスの文章のなかにきわめて近い形で現れないような『ニーベルンゲンの歌』論争の発端となっている点はひとつもない」[52]とまで言っている一方，グレゴリウスはフランク王国の事情よりもブルグント王国の事情についてよく知っていたと主張するゴドフロワ・クルト〔Godefroid KURTH（1847–1916）〕を批判するかたちで，「逆にグレゴリウスは，ブルグントの出来事について述べた数少ない章のなかで，あまり正確とは言えない情報しかもっていなかったように思われる」[53]とも言っている。そのことも含め，「6世紀にグレゴリウスはそれを歴史（イストワール）だと固く信じた，〈我々にとっては〉それで十分である。それ以外のことにたいした重要性はないだろう」[54]。それはグレゴリウスにとって，彼が生まれる前に起こった出来事についての，当時

「歴史（イストワール）」として流通していた情報であるが，彼自身フランク王国にあって，カトリック司教としての立場で，ブルグント王国の年代記を執筆・編纂している。グレゴリウスの年代記が歴史的事実についての説明としては不正確であり，なんらかの潤色の痕跡を留めているとしても，この年代記の基盤になんらかの詩的伝説があるのではない。むしろ年代記のほうが民間伝承と呼ばれるものの根本的な形式であり，詩的伝説の形成にとって前提となる形式であるとソシュールは考える[55]。ソシュールはゲルマン伝説の形成にとって前提となる形式の一つ，伝説が伝説になる前の説話を『クロティルドの詩』と名づける。この『クロティルドの詩』に端を発するのが「クロティルドの裏切り」あるいは「ブルグント族の国家的崩壊」の説話であり，ソシュールによれば，「トゥールのグレゴリウスが属する世代以降，この二つの事柄は完全に同義的な価値をもっていた」。ソシュールは，いわば歴史と伝説の狭間にある，「ブルグントの王女によって引き起こされるブルグンディア王国の崩壊」を主題とする歴史物語（イストワール）の再構成を試みる[56]。

この歴史物語（イストワール）の「序幕」で，クロティルドの父キルペリク〔Hilpéric〔Chilpéric〕〕が，グンドバットによって兄弟殺しの目に遭い，クロティルドの近親者たちはローヌ川へ投げ込まれる。彼女は叔父ゴデギゼル〔Godegisèle（？-500）[57]〕（キルペリクとグンドバットの兄弟）に庇護を求め，彼の領地だったジュネーヴで隠遁生活を送る。そこでの数年間，クロティルドは復讐心をひた隠しにし，ゴデギゼルと信頼関係を築く。「第一幕」で，不運と劣位の境遇にあったブルグント王女クロティルドは，正統派（アタナシウス派＝カトリック）のフランク王クローヴィスから使者を通じて求婚される。アリウス派のブルグント家宗主らからは大反対されるが，困難を乗り越えて結婚は承認される。「第二幕」は王女の旅立ちで，クロティルドとクローヴィスはブルグント王国とフランク王国の国境ではじめて相まみえる。「第三幕」では，秘められたクロティルドの冷酷な本性が，強力な王

である夫の後ろ盾を得て，ブルグント族の命運に影響を及ぼし始める。

故郷であるブルグント王国を滅亡に導く「クロティルドの裏切り」は三回あったことになる。「クロティルド第一の裏切り」は，ゴデギゼルの死に関わる。フランク王国の王妃となったクロティルドは，恩人である叔父ゴデギゼルを焚きつけてグンドバットと争わせたのだが，ジュネーヴにいる時に彼女の取り巻きとなったブルグントの古参党派と結託し，ゴデギゼルを援助せず，死滅させる。「クロティルド第二の裏切り」は，父キルペリクの仇であるグンドバットの後を継いだジギスムント〔Sigismond（？-524）〕の死に関わる。ジギスムントは捕えられてオルレアンに連行され，クロティルドの息子クロドメル〔Clodomir（496？-524）〕の命で暗殺される。「クロティルド第三の裏切り」は，オータンでのブルグント族との最終戦争に関わる。このときブルグント王ゴドマールが殺され，ブルグント王国（リヨン王国）は滅亡する。この三つの「説話のコーパス」を認めるなら，ドイツおよびスカンディナヴィアへ広まったゲルマン伝説を「ローヌ川流域のブルグンディアで495年から534年までに起こった出来事の忠実な反映」として示すことができるとソシュールは言う。ただし，「忠実な反映」とはいえ，数十年間に別々の場所で起こった三つないし四つの歴史的出来事が「ただ一つの町で展開する，同じドラマの連続した日々として扱われ」たり（「分散」ではなく「圧縮」），いくらか順序を損ねたり，名前や役割が「置き換え」られるなど，いくつかの「転位」が生じている。これらの「転位」に「あまりにも重大であるがゆえに隠さざるをえなかった何か」を読み取ることを最優先課題としていれば，ソシュールの伝説・神話研究は「徴候的読解」になり得たかもしれない。ジャン・スタロバンスキーはソシュールのアナグラム研究に関して，「偶然の結果」と「意識的手法」の二者択一を設定したことが「ソシュールの唯一の誤謬」であるとし，「意識も偶然もともに放逐して」，アナグラムに「過程（プロセス）」（無意識的な規則性）を読み込むこ

とを提唱している[58]。だがソシュールが知りたいのは，アナグラムという詩作の手法に則って作られたとしか思えない詩が数多く存在し，それが事実かどうかということだけである。冷徹なまでに事実のみを追求するソシュールの姿勢は，伝説・神話研究，アナグラム研究，政治的言説[59] いずれにおいても貫かれていると言える。

付　記

本論は，2018-2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「ソシュールの伝説・神話に関する手稿の文献学的研究」，課題番号18K00480，研究代表者・金澤忠信）による研究成果の一部である。

注

1）Ferdinand de SAUSSURE, « Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan », éd. par Béatrice TURPIN, *Cahier Saussure*, Paris, L'Herne, 2003, pp. 351-352.〔フェルディナン・ド・ソシュール，「北欧の伝説と説話―ジークフリートからトリスタンまで」，ベアトリス・テュルパン編，『伝説・神話研究』，金澤忠信訳，月曜社，2017年， 7-8 頁。〕

2）Ms. fr. 3959/11, ff. 8-9. ソシュールの手稿を参照する際に用いられる « Ms. fr. » は「ジュネーヴ図書館〔Bibliothèque de Genève〕蔵，フランス語手稿（目録番号）」を表す。« Archives de Saussure » はソシュール家からジュネーヴ図書館に寄託された資料を表す。« f. » はばらばらになっている紙片（に付された番号）を表す。また，以下，引用文において，〈　〉はソシュールによる加筆・修正，［　］は手稿のなかで空白部分あるいは金澤による注釈，傍点は下線を表す。訳は，特に断り書きがない場合は金澤による。なお，現在ソシュールの手稿の多くはジュネーヴ図書館によってインターネット上で公開されている。https://archives.bge-geneve.ch/archives/archives/fonds/saussure_ferdinand_de/n:89/view:all

3）Wilhelm JUNGHANS, *Die Geschichte der fränkischen Könige Childerich und Chlodovech, kritisch untersucht*, Göttingen, Vandenhoeck und Ruprecht, 1857, p. 95.

4）Ms. fr. 3959/11, f. 67.

5）Ms. fr. 3959/11, f. 40.

6）Tullio De MAURO, « Notes biographiques et critiques » in Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles BALLY et Albert SECHEHAYE, avec la collaboration d'Albert RIEDLINGER, Paris, Payot, 1972, p. 343.〔トゥリオ・デ・マウロ，『「ソシュール一般言語学講義」校注』，山内貴美夫訳，而立書房，1976年，318頁，324頁。〕

7）Archives de Saussure 392, f. 246. Cf. Pierre-Yves TESTENOIRE, « Deux pièges de la réception des anagrammes — chronologie et éditions des cahiers », *Cahiers Ferdinand de Saussure*〔*CFS*〕, No. 63, Genève, Librairie Droz, 2010, p. 99.

8）Ms. fr. 3959/4, p. 38.

9）Ms. fr. 3959/11, f. 130.

10）Ms. fr. 3959/1.

11）Cf. *Cahier Saussure*, p. 429, note 4.〔『伝説・神話研究』，127頁，原注４。〕

12）Ms. fr. 3958/4, p. 120–1 v.〔『伝説・神話研究』，53頁。〕

13）Ms. fr. 3958/7, p. 119.

14）Ms. fr. 3958/6, p. 48v.〔『伝説・神話研究』，131頁，訳注29。〕

15）Ms. fr. 3959/4, p. 8 ; *Cahier Saussure*, p. 364.〔『伝説・神話研究』，27頁。〕

16）Ms. fr. 3959/11, f. 155; *Cahier Saussure*, p. 426.〔『伝説・神話研究』，123頁。〕

17）*Ibid.*

18）Cf.『ニーベルンゲンの歌』（前編），石川栄作訳，ちくま文庫，2011年，９，11頁訳注。

19）Ms. fr. 3958/4, p. 40v; *Cahier Saussure*, p. 375.〔『伝説・神話研究』，42頁。〕

20）Cf. 金澤忠信，「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」，『香川大学経済論叢』第92巻第３号，2019年12月，７–29頁。

21）Ms. fr. 3958/2, p. 6 ; *Cahier Saussure*, p. 363.〔『伝説・神話研究』，24頁。〕

22）Ms. fr. 3958/2, p. 6v; *Cahier Saussure*, p. 363.〔『伝説・神話研究』，24頁。〕

23）Ms. fr. 3958/7, p. 37; *Cahier Saussure*, p. 391.〔『伝説・神話研究』，68頁。〕

24）Ms. fr. 3959/11, f. 7.

25）Ms. fr. 3958/4, p. 73v.

26）Ms. fr. 3958/4, p. 72v.

27）Ms. fr. 3958/4, p. 96v.

28）Felix DAHN, *Die Könige der Germanen: das Wesen des ältesten Königthums der germanischen Stämme und seine Geschichte bis auf die Feudalzeit*, Dritte Abtheilung, Würzburg, Stuber, 1866, pp. 254–275.

29）Ms. fr. 3959/11, f. 12bis.

30）ケーザのシモン〔Simon de Kéza［Kézai Simon］〕は実際には13世紀ハンガリーの年代記作者。主著 *Gesta Hunnorum et Hungarorum*.
31）Ms. fr. 3959/7, p. 1.
32）Ms. fr. 3958/7, p. 37v; *Cahier Saussure*, p. 392.〔『伝説・神話研究』，68頁。〕
33）Ms. fr. 3959/7, p. 5 v.〔『伝説・神話研究』，134頁，訳注45。〕
34）カルロ・ギンズブルグ，『神話・寓意・徴候』，竹山博英訳，せりか書房，1988年，177–226頁。
35）ジークムント・フロイト，「ミケランジェロのモーゼ像」，高橋義孝訳，『フロイト著作集 3』，人文書店，1969年，301–302頁。
36）『神話・寓意・徴候』，189頁。
37）同書，190頁。
38）同所。
39）Ms. fr. 3959/10, p. 17; *Cahier Saussure*, p. 421.〔『伝説・神話研究』，114–115頁。〕Cf. 金澤忠信，「歴史と伝説―ソシュールの伝説・神話研究」，『フランス文学』第33号，日本フランス語フランス文学会中国・四国支部編，2021年6月，1–15頁。
40）Ms. fr. 3958/4, p. 10; *Cahier Saussure*, p. 370.〔『伝説・神話研究』，35頁。〕
41）Ms. fr. 3959/3, p. 3 ; *Cahier Saussure*, p. 400.〔『伝説・神話研究』，81頁。〕
42）Ms. fr. 3951/1.1, p. 11. 訳は金澤による。Cf. 前田英樹編・訳・著，『沈黙するソシュール』，講談社学術文庫，2010年，28頁。『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集Ⅰ　自筆原稿『言語の科学』』，松澤和宏校註・訳，2013年，216頁。
43）Ms. fr. 3959/3, p. 1, Ms. fr. 3959/8, p. 44; *Cahier Saussure*, p. 399, 413.〔『伝説・神話研究』，80，102頁。〕
44）山田広昭，「精神分析批評（1）―テクストの無意識」，丹治愛・山田広昭編，『文学批評への招待』（放送大学教材），NHK出版，2018年。
45）同書，148–151頁。
46）坂口安吾，「飛騨・高山の抹殺」，『坂口安吾全集』第18巻，ちくま文庫，1991年，469頁。
47）同書，480頁。
48）同書，484頁。
49）同所。
50）同所。
51）トゥールのグレゴリウス，『フランク史――〇巻の歴史』，杉本正俊訳，新評論，2007年，111頁：「女王クロトキルディスは，クロドメリスその他の息子

たちに言った。／『親しい息子たちよ，私がおまえたちを育てたことを後悔しないように。私が受けた不正を怒り，私の父母の死（巻二，二八）の恨みを晴らしてもらえまいか』」

52）Ms. fr. 3958/4, p. 115; *Cahier Saussure*, p. 380.〔『伝説・神話研究』，51頁。〕

53）Ms. fr. 3959/4, p. 33; *Cahier Saussure*, p. 367.〔『伝説・神話研究』，30頁。〕

54）Ms. fr. 3958/1, p. 3 ; *Cahier Saussure*, p. 361.〔『伝説・神話研究』，20頁。〕

55）Ms. fr. 3959/11, f. 124; *Cahier Saussure*, p. 424.〔『伝説・神話研究』，119–120頁。〕

56）Ms. fr. 3958/2, pp. 1 –2, p. 31; *Cahier Saussure*, pp. 361–364.〔『伝説・神話研究』，21–22頁，25頁。〕Cf.「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」，19–20頁。

57）Ms. fr. 3959/4, p. 2 ; Augustin THIERRY, *Récits des Temps Mérovingiens*, Paris, Libraire Garnier Frères, 1840.〔オーギュスタン・ティエリ，『メロヴィング王朝史話』（上・下），小島輝正訳，岩波文庫，1992年。〕

58）Jean STAROBINSKI, *Les mots sous les mots — Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris, Gallimard, 1971, p. 154.〔ジャン・スタロバンスキー，『ソシュールのアナグラム』，金澤忠信訳，水声社，2006年，186頁。〕

59）金澤忠信，『ソシュールの政治的言説』，月曜社，2017年。

参考文献

石川栄作（1992），『『ニーベルンゲンの歌』—構成と内容』，郁文堂。

———（2001），『「ニーベルンゲンの歌」を読む』，講談社学術文庫。

———（2004），『ジークフリート伝説—ワーグナー『指環』の源流』，講談社学術文庫。

———〔訳〕（2011），『ニーベルンゲンの歌』（前編・後編），ちくま文庫。

金澤忠信（2017），『ソシュールの政治的言説』，月曜社。

———（2017），「凡庸さとありきたりなもの」，『ユリイカ』「総特集・蓮實重彦」10月臨時増刊号，青土社，355–369頁。

———（2018），「ソシュールの伝説・神話研究」，『21世紀のソシュール』，松澤和宏編，水声社，155–170頁。

———（2019），「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」，『香川大学経済論叢』第92巻第3号，2019年12月，7–29頁。

———（2021），「歴史と伝説—ソシュールの伝説・神話研究」，『フランス文学』第33号，日本フランス語フランス文学会中国・四国支部編，2021年6月，1–

15頁。
佐藤彰一（2000），『ポスト・ローマ期フランク史の研究』，岩波オンデマンドブックス。
———（2004），『歴史書を読む—『歴史十書』のテクスト科学』，山川出版社。
———（2021），『フランク史Ⅰ—クローヴィス以前』，名古屋大学出版会。
佐藤輝夫〔訳〕（1953），ベディエ編，『トリスタン・イズー物語』，岩波文庫。
———（1981），『トリスタン伝説—流布本系の研究』，中央公論社。
菅原邦城〔訳・解説〕（1979），『ゲルマン北欧の英雄伝説—ヴォルスンガ・サガ』，東海大学出版会。
浜崎長寿・松村国隆・大澤慶子〔編〕（1981），『ニーベルンゲンの歌　抜粋・訳注』，大学書林。
山田広昭（2018），「精神分析批評（1）—テクストの無意識」，丹治愛・山田広昭編，『文学批評への招待』（放送大学教材），NHK出版。
渡邊徳明（2011），「『ニーベルンゲンの歌』の舞台裏—エッツェル王の二人の后とベルネのディエトリーヒ」，『英雄史とは何か』，中央大学人文科学研究所編（研究叢書55），中央大学出版部。
ENGLER, Rudolf（1974），« Sémiologies saussuriennes — 1. De l'existence du signe », *Cahiers Ferdinand de Saussure* 29, Genève, Droz, pp. 45–73.
———（1980），« Sémiologies saussuriennes — 2. Le canevas », *Cahiers Ferdinand de Saussure* 34, Genève, Droz, pp. 3–16.
FREUD, Sigmund（1914），《Der Mose des Michelangelo》.〔ジークムント・フロイト，「ミケランジェロのモーゼ像」，髙橋義孝訳，『フロイト著作集3』，人文書院，1969年。〕
GINZBURG, Carlo（1986），*Miti Emblemi Spie — Morfologia e storia*, Torino, Einaudi.〔カルロ・ギンズブルグ，『神話・寓意・徴候』，竹山博英訳，せりか書房，1988年。〕
GODEL, Robert（1957），*Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale*, Genève, Droz.
GREGORIVS EPISCOPVS TVRONENSIS［Grégoire de Tours］，*HISTORIA FRANCORVM*.〔トゥールのグレゴリウス，『フランク史—一〇巻の歴史』，杉本正俊訳，新評論，2007年。〕
LE JEAN, Régine（2006），*Les Mérovingiens*（Collection QUE SAIT-JE?），Paris, PUF.〔レジーヌ・ル・ジャン，『メロヴィング朝』，加納修訳，白水社文庫クセジュ，2009年。〕
MARCELLO-NIZIA, Christiane［éd.］（1995），*Tristan et Iseult, Les premières versions*

européennes, Paris, Gallimard（La Pléiade）.

MONOD, Gabriel（1872–1885）, *Études critiques sur les sources de l'histoire mérovingienne*, 2 vol., Paris, A. Franck.

———（1876）, « Du progrès des études historiques en France depuis le XVIe siècle », *Revue historique*, tome I, janvier-juin.

MUSSOT-GOULARD, René（1997）, *Clovis*（Collection QUE SAIT-JE ?）, Paris, PUF.〔ルネ・ミュソ＝グラール，『クローヴィス』，加納修訳，白水社文庫クセジュ，2000年。〕

SAUSSURE, Ferdinand de（1879［1878］）, *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Leipzig, Teubner.

———（1916）, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles BALLY et Albert SECHEHAYE, avec la collaboration d'Albert RIEDLINGER, Paris, Payot.〔フェルディナン・ド・ソシュール，『一般言語学講義』（改版），小林英夫訳，岩波書店，1972年。『新訳ソシュール一般言語学講義』，町田健訳，研究社，2016年。〕

———（1922）, *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*, publié par Charles BALLY et Léopold GAUTIER, Genève, Sonor; repr., Genève, Slatkine, 1970.

———（2003）, « Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan », présentation et édition par Béatrice TÜRPIN, *Saussure*, Paris, L'Herne, 2003.〔フェルディナン・ド・ソシュール，「北欧の伝説と説話—ジークフリートからトリスタンまで」，ベアトリス・テュルパン編，『伝説・神話研究』，金澤忠信訳，月曜社，2017年。〕

STAROBINSKI, Jean（1971）, *Les mots sous les mots — Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris, Gallimard.〔ジャン・スタロバンスキー，『ソシュールのアナグラム』，金澤忠信訳，水声社，2006年〕

TESTENOIRE, Pierre-Yves（2013）, *Ferdinand de Saussure à la recherche des anagrammes*, Lambert-Lucas.

THIERRY, Amédée（1856）, *Histoire d'Attila et de ses successeurs, jusqu'à l'établissement des Hongrois en Europe*, tome I–II, Paris, Didier.

THIERRY, Augustin（1840）, *Récits des Temps Mérovingiens*, Paris, Libraire Garnier Frères.〔オーギュスタン・ティエリ，『メロヴィング王朝史話』（上・下），小島輝正訳，岩波文庫，1992年。〕

TÜRPIN, Béatrice（2003）, « Légendes — Mythes — Histoire. La circulation des signes », *Cahier Saussure,* Paris, L'Herne, pp. 307–316.